

# 高大接続改革とeポートフォリオ—資質・能力を多面的・多角的に評価し育成していくために—

森本康彦

東京学芸大学

## 高大接続改革とは<sup>1)</sup>

2020年度に実施する2021年度入学者選抜から大学入試が大きく変わる。これに伴い、今、高等学校では、学習指導の方法や評価の在り方などの議論が盛んに行われている。この背景には、戦後最も大きな教育改革と言われる「高大接続改革」がある。これは、単に大学入試の方法を変えるという単純なものではない。高等学校と大学での学びを一貫して、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」といった学力の3要素を確実に育成し評価することを目指した、高等学校教育—大学入学者選抜—大学教育の各改革を三位一体で進める大改革である<sup>2)</sup>。

高等学校教育では、カリキュラム・マネジメントを通して、主体的・対話的で深い学び（いわゆる、アクティブ・ラーニング）を充実させ、多面的・多角的に評価することが改革として行われる。

大学教育では、選抜（アドミッション・ポリシー）、教育（カリキュラム・ポリシー）、卒業（ディプロマ・ポリシー）の各段階の一体的な策定を行い、それに基づいた改革が行われる。また、高等学校教育での学びを踏まえ、学生を3つのポリシーに基づいて、学力の3要素で育成されるべき資質・能力をさらに高める必要がある。

そして、大学入学者選抜では、これらの2つの改革を接続する役割があり、大学が定めたアドミッション・ポリシーと高等学校教育での学びの評価を基に選抜されることが改革として行われる。

## 育成すべき資質・能力の3つの柱

学力の3要素で育成すべき資質・能力の3つの柱として、1) 個別の知識・技能、2) 思考力・判断力・表現力等、3) 学びに向かう力・人間性等<sup>3)</sup>、これらは氷山に例えられる。氷山は、水面から見える部分は小さいが、水面下はその何倍もの大きな塊からなっており、この部分が大きければ大きいほど安定する。資質・能力では、「知識・技能」が水面の上の部分に例えられ、テストで容易に測ることができるものである。実は、この「知識・技能」を実際に学びに活かしていく（活用する）ためには、水面下の大きな塊の部分にあたる資質・能力をしっかりと有していることが不可欠であり、それが「思考力・判断力・表現力等」と「学びに向かう力・人間性等」である。これらは、テストだけでは評価しにくい資質・能力であり、eポートフォリオを用いることで多面的・多角的に評価することが可能となる（図-1）

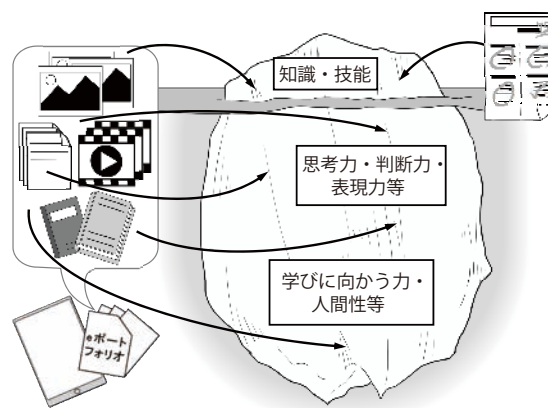


図-1 資質・能力の氷山モデル

## eポートフォリオとは

生徒・学生自らが、学習を振り返って次につなげる主体的な学びの過程では、さまざまな学びの記録が生成されるが、これら記録を電子的に蓄積したもののすべてが「eポートフォリオ」である。学習過程において蓄積されたeポートフォリオは、生徒・学生の学びの教材として、それ自体が活用できるだけでなく、継続して蓄積・活用していくことで、過去と現在の学習状況を把握・評価し、未来の伸びしろまで見える化できる「学びのアルバム」となる。特に、生徒・学生は、いつでもどこでもeポートフォリオを記録し、見返して活用することができるため、自問自答による学びの振り返り（自己評価）が促され、仲間同士で時空を超えて相互に学び合ったり（相互評価）、教員などからアドバイスがもらえたりする（教員評価、他者評価）。つまり、eポートフォリオは、アクティブ・ラーニングを行う“必須のツール”であり、学びを促進させるとともに、学力の3要素で育成すべき資質・能力を多面的・多角的に評価することを容易にする。

## 育成すべき資質・能力とは

中央教育審議会答申では、「教育課程全体を通じてどのような資質・能力の育成を目指すのかは、各学校の学校教育目標等として具体化されることになる」とされている<sup>4)</sup>。しかし、各教科等の学習指導要領解説では、育成すべき資質・能力は、文章中のさまざまな箇所にも埋め込まれて記述・表現されているため、具体的にそれらを把握することは難しいのが現状である。

そこで、本稿では、平成30年改訂高等学校学習指導要領解説(国語、地理歴史、公民、数学、理科、保健体育、芸術、外国語、家庭、情報、総合的な探究の時間、特別活動)から、育成すべき資質・能力に関する記述を抽出・整理することで、具体的な育成すべき資質・能力を明らかにすることを試みた。

各教科等で育成すべき「知識・技能」のほか、「思考力・判断力・表現力等」と「学びに向かう力・人間性等」に関する記述を抽出したところ、全8,782件の項目が得られ、〈思考力〉は2,048件、〈判断力〉は275件、〈表現力〉は579件、〈課題解決〉は937件、〈主体性〉は1,367件、〈協働性〉は1,300件、〈多様性〉は956件、〈豊かな心〉は1,320件分類され、それぞれ表-1、2の通りに整理された。各表の小カテゴリは、学習指導要領の文言を参考に「力」と「態度」でまとめている。なお、〈豊かな心〉の小カテゴリは、平成29年改訂小学校及び中学校学習指導要領解説「特別の教科 道徳編」を参考に「力」と「態度」を包括した表現としてそのままの形とした。これにより、「生徒に対してどのような資質・能力の育成を目指すのかを指導のねらいとして設定」し<sup>3)</sup>、生徒一人ひとりが「前の学びからどのように成長しているか、よ

表-1 「思考力・判断力・表現力等」に含まれる資質・能力

大枠	中カテゴリ	小カテゴリ
思考力	ひろげる力	考えをひろげる力
		発展的に考える力
		創造する力
	予想する力	予想する力
		推論する力
	まとめる力	考えをまとめる力
		構造化する力
		抽象化する力
	分析する力	順序づける力
		関連づける力
		分類する力
		比較する力
		理由づける力
具体化する力		
とらえる力	多面的・多角的にとらえる力	
	批判的にとらえる力	
判断力	選択する力	選択する力
		判断する力
	決定する力	意思決定する力
表現力	伝達する力・発信する力	文字で表現する力
		言葉で表現する力
図で表現する力		
身体で表現する力		
	プレゼンテーション力	プレゼンテーション力
課題解決	課題設定を行う力	課題を発見する力
		課題を設定する力
	方略を立てる力	方略を立てる力
解決の検証をする力	解決の検証をする力	



り深い学びに向かっているか」を評価し見取る際の参考になると考えられる<sup>4)</sup>。

## eポートフォリオを活用した資質・能力の評価方法

### (1) 資質・能力の多面的・多角的な評価方法

資質・能力の評価については、「単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価する」とし、「指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動を評価の対象とし、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくこと」とされている<sup>3)</sup>。つまり、資

質・能力を多面的・多角的に評価するために、eポートフォリオの活用が有効的であるということが読み取れる。しかし、生徒の学習活動の、こういったタイミングで、どのeポートフォリオを用いて、どのように評価するかを明らかにする必要がある。

そこで、本稿では、この解決の手立てとして、eポートフォリオを活用した学習評価の方法（以下、アセスメント方法）をまとめた（表-3）。アセスメント方法は、生徒の学習活動の何に焦点を当て、どのeポートフォリオを用いて、資質・能力の育成状況を把握し、どう学習支援するかの方法であり、これらはハンドブックとして公開している<sup>5)</sup>。これらのアセスメント法を組み合わせることで、あらゆる学習活動に対して、適切なeポートフォリオを蓄積・活用しながら多面的・多角的な評価を実施していくことが可能になると期待できる。

表-2 「学びに向かう力・人間性等」に含まれる資質・能力

大枠	中カテゴリ	小カテゴリ
学びに向かう力	主体的に学習に取り組む態度	主体的に学習に取り組む態度
		主体的になる態度
		関心を持つ態度
		粘り強く学ぶ態度
	自らの学習を調整する態度	粘り強く取り組む態度
		学習を見通す態度
	キャリアを形成する態度	学びを振り返る態度
		次につなげる態度
		キャリアを形成する態度
		自己実現する態度
人間性等	コミュニケーション力	伝え合う力
		交流する態度
	協働する力	チームワーク力
		リーダーシップ力
		合意形成する力
		よりよい人間関係を形成する態度
	理解する態度	集団・社会に貢献する態度
		自己を理解する態度
		他者を理解する態度
		歴史や伝統、文化を理解する態度
尊重する態度	自己を尊重する態度	
	他者を尊重する態度	
	歴史や伝統、文化を尊重する態度	
	感性	
豊かな心	豊かな心	自主、自立、自由と責任
		節度、節制
		思いやり、感謝
		礼儀
		家族愛、家庭生活の充実
		生命の尊さ
		自然愛護
		感動、畏敬の念
		よりよく生きる喜び
		創造性

表-3 eポートフォリオを活用したアセスメント方法<sup>5)</sup>

アセスメント方法	説明
テスト法	テストを受け、テストの解答と解き直しから学習状況を把握する方法。
質問法	質問（アンケート等）の回答から学習状況を把握する方法。
作品法	学習成果としての作品から学習状況を把握する方法。
レポート法	レポートやエッセイ、小論文の記述から学習状況を把握する方法。
日誌法	日々の出来事やその活動、思いの記述などから学習状況を把握する方法。
実技法	実技の記録などから学習状況を把握する方法。
体験法	体験の記録などから学習状況を把握する方法。
プレゼンテーション法	プレゼンテーションの記録などから学習状況を把握する方法。
議論法	議論や討論の過程の記録およびその結果から学習状況を把握する方法。
思考・判断法	思考・認知過程を文章や言語で言語化・図式化することで外化させ、その内容から学習状況を把握する方法。
ノート法	気づきや思考が外化されたノートの記述から学習状況を把握する方法。
演習法	演習した解答等の記述などから学習状況を把握する方法。
実習法	実習の記録から学習状況を把握する方法。
課題解決・探究法	課題解決や探究の遂行過程の記録およびその結果から学習状況を把握する方法。
観察法	学習過程における生徒の活動を観察することで、学習状況を把握する方法。
面談法	教員と生徒（ただし、保護者や第三者が加わることもある）との面談（カンファレンス）から学習状況を把握する方法。
ショーケース法	生徒の特徴的な学びをまとめたショーケース・ポートフォリオを用いて学習状況を把握する方法。

## (2) 横断的な学びにおける資質・能力の評価方法

『主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度』など、筆記試験や技能試験によって評価しにくい資質・能力については、特に日々の高等学校の学習活動等を通じて多面的な評価を行う<sup>2)</sup>、「これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、各教科等の学習とともに、教科等横断的な視点に立った学習が重要であり、各教科等における学習の充実のもとより、教科等間のつながりを捉えた学習を進める必要がある<sup>4)</sup>。つまり、特に「学びに向かう力・人間性等」の育成とその評価は、横断的な学びの視点が必須であることが分かる。

各教科等では主に「知識・技能」の育成とその評価が重要となるが、たとえば、各教科等の学びの中に、授業の内容を変えずに「協働する力」の「チームワーク力」や「合意形成する力」を養うための学習活動として【学び合い／議論】を定期的かつバランスよく埋め込み、実施していく際に学んだ成果や振り返りの記録をeポートフォリオとして蓄積・活用していく。その後、蓄積されたeポートフォリオを用いて、生徒の学習活動を時系列でつなげて見直すと、一連の学びが浮かび上がる(図-2)。さらに、上手くeポートフォリオにより見える化することで、「生徒一人ひとりの持つよい点や可能性などの多様な側面、進歩の様子などを把握し、学年や学期にわたって生徒がどれだけ成長したかという視点」で評価することができるようになる<sup>3)</sup>。

このように、求める資質・能力とそれらを育成す

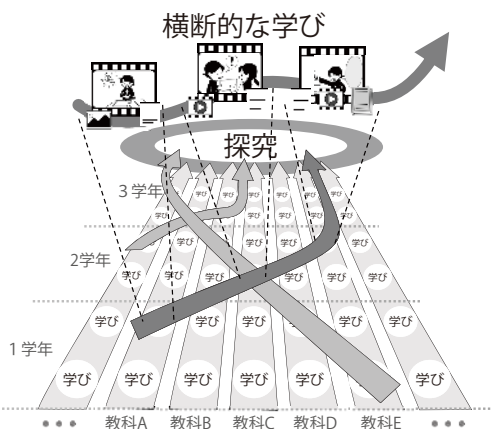


図-2 横断的な学びにおける資質・能力の育成・評価のイメージ

る学習活動を各教科等の学びの中に散りばめ、バランスよく埋め込み、eポートフォリオを活用し実施していくことで、「各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと」によるカリキュラム・マネジメントを実現するための一助になると考えられる<sup>4)</sup>。

## 高大接続改革におけるeポートフォリオの役割

高大接続改革において、高等学校教育、大学入学者選抜と大学教育をつなげることができるツールがeポートフォリオである(図-3)。

生徒は、高等学校のすべての学びを通じてeポートフォリオを蓄積・活用し、その多くのeポートフォリオの中から自ら精選したものの一部を大学入学者選抜で活用する。また、それに引き続き、大学教育でもeポートフォリオを活用し、さらに、学生は、新たな学びを通して、eポートフォリオを蓄積・活用し、学びを深めていく。そうすることで、eポートフォリオは、高等学校教育から大学教育の7年間を通じた学びを、あたかも1つのシームレスな学びのようにつなげることができ、生徒・学生のすべての学びを支えることを可能にしてくれる。

特に、大学教育においては、高等学校教育とつながることにより、従来のように入試という見えない壁によって学びが切り離されることなく、高校教育での学びを引き継いで、資質・能力をさらに向上さ

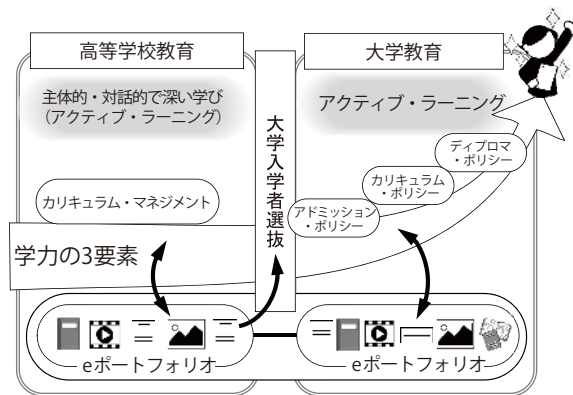


図-3 eポートフォリオがつなぐ7年間の学び





せ、著しい成長を遂げることが可能になると期待できる。まさに、この7年間の学びは、キャリア形成そのものであり、大学卒業時点で、社会の各分野で活躍できる人材に成長できるだろう。

生徒・学生は、eポートフォリオをツールとして活用することで、7年間を通して、見通しを持ち、粘り強く、振り返りながら主体的に学び続けることができ、さらに、蓄積された多量のeポートフォリオを用いることで、7年間を通じた進歩の状況やよい点、その先の可能性まで見える化できるようになる。これが、高大接続改革におけるeポートフォリオを活用した学びのカタチである。

よく、大学入試の出願書類、または、そのための記録をeポートフォリオと呼ぶケースが見受けられるが、それはeポートフォリオのごく限定された一側面にすぎない。eポートフォリオを貯めることが目的であってはならない。それは、手段であり学び

そのものである。eポートフォリオは、生徒・学生の学びを深め、学びの軌跡とその成果を見える化してくれる、とてもポジティブなものである。

#### 参考文献

- 1) 森本康彦：高大接続改革におけるeポートフォリオの役割と活用方法、情報処理学会研究報告、Vol.2018-CLE-26, No.4, pp.1-6 (2018).
- 2) 高大接続システム改革会議：高大接続システム改革会議「最終報告」(2018).
- 3) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説 総則編 (2018).
- 4) 中央教育審議会：幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申) (2016).
- 5) <https://sun.u-gakugei.ac.jp/ePortfolio/assessment/> (参照 2019.02.22)

(2019年2月25日受付)

森本康彦 (正会員) morimoto@u-gakugei.ac.jp

1991年三菱電機(株)・情報技術総合研究所。1996年広島市立牛田中学校 教諭(数学)、2004年千葉学芸高等学校 教諭(情報)、その後、富士常葉大学・准教授を経て、2009年東京学芸大学・准教授、2017年同大学・教授。博士(工学)。eポートフォリオ、ICT活用教育、教育AI活用を専門とする。

